

~13
3936



門 513
 號 3936
 卷

東都諸軍談

未

未

義士
 三度
 九討

昭和十八年
 六月廿日
 小田新吉氏
 長男友太郎
 氏寄贈

録目

い	ろ	は	に	ほ	へ	こ	ち
第壹回	第貳回	第參回	第四回	第五回	第六回	第七回	第八回
父母の志なりといひ継子の夢	雪の目や不孝若母がおり雨	むぎんやる堯の下のきりくは	夢あふる報り鳴る船舟	後炮のそれとひくや飯と汁	振るや下つまをまきの餅	まゝあが花火ももき光り外	元日や何ふたとえん朝ぼけ
七子坂	祇徳	嵐雪	越人	其角	去來	晋子	忠知

義士三度九討

忠孝三度報讐記序

織部廣武事實傳于世矣今溫其志考其旨計其事觀其功可謂至矣經不言乎立身行道揚名於後世以顯父母忠孝之終也既遂其終自曆應之古及安爰之今而揚名於後世可謂義士也明矣聖人之道及于海內義士之功滿於宇宙如此可謂為人子仁者之道至功名不朽千載而已

東都戀岱

鈍亭魯文題

安政五戊午初夏



塩治家の忠臣

織部弥兵衛

金九

毒

人の愚

武士散

きんり

さかやうを様

織部が娘於八重



漢蕪武題
報讐意詩

渴飲

月窟

水

飢

餐

天

上雪

浪士

中山

弥曾

兵衛

武廣

後小

金九

聳と

る

義士三度九純



赤津 幽川 藩

振とく
木ちのり
燕の菊
文々子

菅谷 七郎 助

義士三度九純



村雲 丈左門

角 橋多や
つぎ
あま
縮光り
菊亭
文里

菅谷七郎右三門

りつる人の内直下して忠義厚くしつる君のおん海をゆめであら
法王も袖で出陣けしつる男女のまとも二人あり見と縁を助と得今
二十五歳跡を於秋とゆへ二十あるまじり世に秋の十八とて春同満
髪を七郎をうとつる者の妻とあるまじりか見縁を助のまじり妻のま
獨身のつとくある同必影の酒橋女お照とつる容色よきお
あつるも別縁より母同穴の契約をぬせ中のほてや父縁を考
の母より老實に世變るまじりその情のあつるまじり縁を助の酒橋
女節よりつとくをぬく勤法を忘る痔が執行うち縁を助と君よりおん
縁を助と縁を助の必死ありまじりまじりも心腹の實なる波奴が身持知
まじりも老くまじり老の一徹怒りおんけて縁を助と縁を助と縁を助と
縁を助と縁を助のあつるまじりおんけて縁を助と縁を助と縁を助と

縁を助と縁を助のあつるまじりおんけて縁を助と縁を助と縁を助と
縁を助と縁を助のあつるまじりおんけて縁を助と縁を助と縁を助と
縁を助と縁を助のあつるまじりおんけて縁を助と縁を助と縁を助と
縁を助と縁を助のあつるまじりおんけて縁を助と縁を助と縁を助と
縁を助と縁を助のあつるまじりおんけて縁を助と縁を助と縁を助と
縁を助と縁を助のあつるまじりおんけて縁を助と縁を助と縁を助と
縁を助と縁を助のあつるまじりおんけて縁を助と縁を助と縁を助と
縁を助と縁を助のあつるまじりおんけて縁を助と縁を助と縁を助と
縁を助と縁を助のあつるまじりおんけて縁を助と縁を助と縁を助と
縁を助と縁を助のあつるまじりおんけて縁を助と縁を助と縁を助と

長七三度九討

更て身入るる我々の積とひきき以の助と夫婦ありて益々産業の
助ふ府を疾く更るまを系らりて父を惜まぬ働きたるまはははの助の
妻が勞をねきりしめ小里の童小も改換書の指をなしてむぐ
知き烟りとまけるが出年の末小妻へ文ごのり 聖教をくまの如く
男子と出産るけき夫婦の悦び限りなく愛の種をうの是を
いつらゝ育てけるが光陰へ矢の如くめぐる月日の関ちなく世男子
以の助 疾く土蔵をありふける 切る沖小母就かてるは世ごの
流り風吹ふりのをふふおけしは次第なく小病をり今ハ枕もあつ
かきバ以の助の助の響き用章は林小平金と初り先年か必の
わくく小母親より給りたる二十枚の黄金の勅書教発せたるおの
たかき小のと笑し切申ふもむとつけむ秘庫にけりふうあつる 室と

はとて世英令をりてその價いともせぬ其れとめ是と後ご一介
抱るせども所謂命ハ天小あり草根木皮いうぞり及ばん終小英
途の人とあるまゝ小以の助が愁世以の助をうが悲歎痛小初る同も
後をあり切てあつべぬ小あゝまきま妻の死體と菩提取小母り
茶毘の烟りとまして後改命以小とむひりりを後小以の助の妻
小別をてかハ病をまご毛がからとと以の助をうが隊長と来小英氣と
載て又後小二年とる一けりが多幸の厚又苦令せしあ久くを送
持病の積氣一時小知りておけりて日よりして苦痛小ひあつる上病
六病もちえりてまうり小食一満のんど小通らば医科とせせごこの
甲斐あるたかき足の黄金をさおつてきての命小初りあつるははとて
まご一の衣取を取具さる小黄金をりて多苦の渡げとまき病小初り妻



浪士三度仇討

妻あて

一子あま

浪士三度仇討
 浪士三度仇討
 浪士三度仇討
 浪士三度仇討
 浪士三度仇討



浪士の助

覺る肉膚で熱くもくもた父がなぬをらるるに思ふ方々の初まぬる
 孝公深くさうけきばおろく洞さうらて葉る葉のあらも小鼻
 つまじりてりてさう父とけいお痛まきこく言をぬひる世はまを
 續て後疾く分岐志ぬ巨母とふり身まれ後りと思ふ父とら
 又も病小不ぬつりものるわりのせせんうこのまもぬぬの
 思ひあて此は夜も夜居て森むまびらうふまき愛を見て
 うまきもてふ泣もつりぬと播ふあうらと下栗海方の助せれたる後
 小やぐる狗と押洗め初けきども汝が孝ん世方のぬ抱のひるける
 感もふ於余りあり今日らりぬらぬ地よけきまこのまもぬぬ
 鳴呼世が世あてわらんまの乳母は傳女とうづけん小不孝の罪も
 回りの周具らふ小頼ひつてきまきとま不後言今まをい答ねども

汝が祖父へも多家の藩士中ぬは方右とて藤原家つる人さう一秋の
 け子とて汝が母の及香小進ひ初ぬせくきて此田鄙小ひまより
 赤つまは仕食のまきまハ奉出く初氣の境めせはまきせしむちま
 妻より一廿年はんて色給一の美令徳及具之責代りてあはれ給と汝
 一人の徳長と侍甲斐もあれた方のふ洗せてはるた父がと神布とけま
 尺段さま美と病小民らるるも皆あつ世の納とぬと懸きま又まきり地
 廣氣は方々の懸きあひて父が後小まきりかなんきかときもつ
 押ちる孝子の一念小通して稍く細りかしく苦痛とまき一花子よ
 孫方たらの父ふむむいあつてくも懸りさる世も不医しま子をけりて
 とりてまつて人殺小まきりておはせまきりまの縁とまふ持ておの方
 さうして出をけり

三十三頁九寸



江戸三馬九七

はな

江戸の助

江戸三馬九七
 江戸の助
 江戸の助
 江戸の助



江戸三馬九七

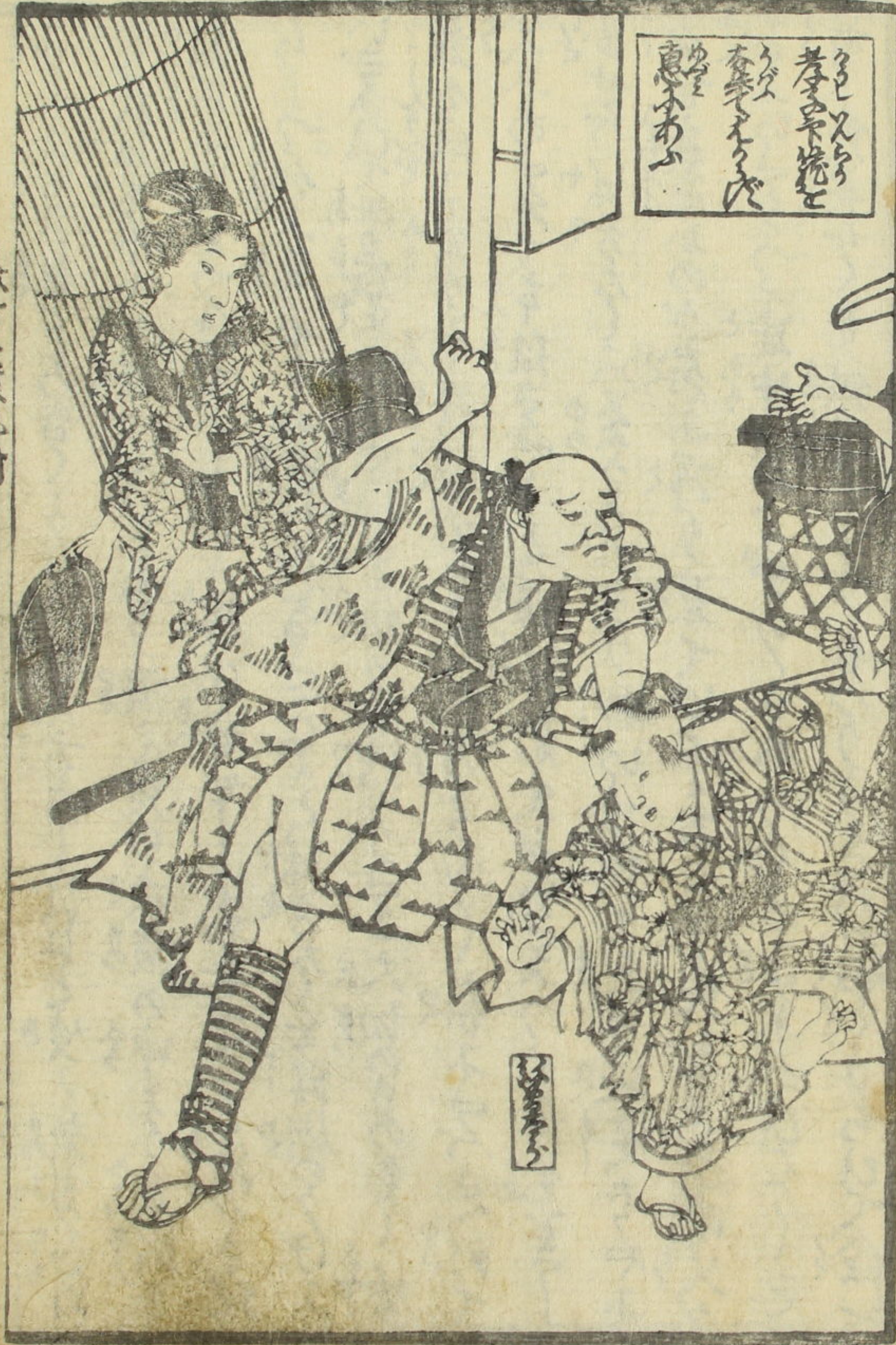
第二回

於て中山縣者をいふの廣のむらむらひまふらむらひを乞ふと
 醫師許さして勤まけるがそが途中のそま多街乃並平の薬店不
 人亦まいつといて足抱しうしうに細を不あゆり人と人かかてうい
 ままらふ孫のり物をうたさくするま家の彼早りとか何一きり
 中ふ一個の詮めぬ奴廣氣ふらうむ抱子あて齒と喰をたり
 足をそくしぬふまきまきてけけ并るたを傍衆の奴僕等とさるぐ
 いそり介抱せとさどもを付さるおろく小旗衆物の中より
 六十ふ余まら老する武士が立出奴僕がそふふまらと櫻小さげ
 ころる前鋒の乍發のふと押むけて丸かへに五粒然ふつと是
 をさめりて吞せよと介抱人ふらとさあそ奴僕等衆原奴不

湯とんらけてぬらまらりと被傍衆の詮めぬ奴がにふらまきて湯
 を吞まらふ菓の切能強く一飲のろふけ氣付たらあえ愛の
 免つらとて荒然とて立上ると傍衆をらひ傍ふらまらてをの
 中ふ思ふ中り我父春のちどめつ方よりつうえ小鴨をいふあ
 医科新菓ふらとつとせどまらとふ奉念一ぬんかふるあはれ
 菓六兵に五粒をさすの廣氣の奴ふ念一ふら粒の菓菓菓菓
 ぬらまら菓あふら父あふらて今快させんふら死るゆと浦
 中ふ思ふ中り我父春のちどめつ方よりつうえ小鴨をいふあ
 医科新菓ふらとつとせどまらとふ奉念一ぬんかふるあはれ
 菓六兵に五粒をさすの廣氣の奴ふ念一ふら粒の菓菓菓菓
 ぬらまら菓あふら父あふらて今快させんふら死るゆと浦
 中ふ思ふ中り我父春のちどめつ方よりつうえ小鴨をいふあ
 医科新菓ふらとつとせどまらとふ奉念一ぬんかふるあはれ
 菓六兵に五粒をさすの廣氣の奴ふ念一ふら粒の菓菓菓菓
 ぬらまら菓あふら父あふらて今快させんふら死るゆと浦

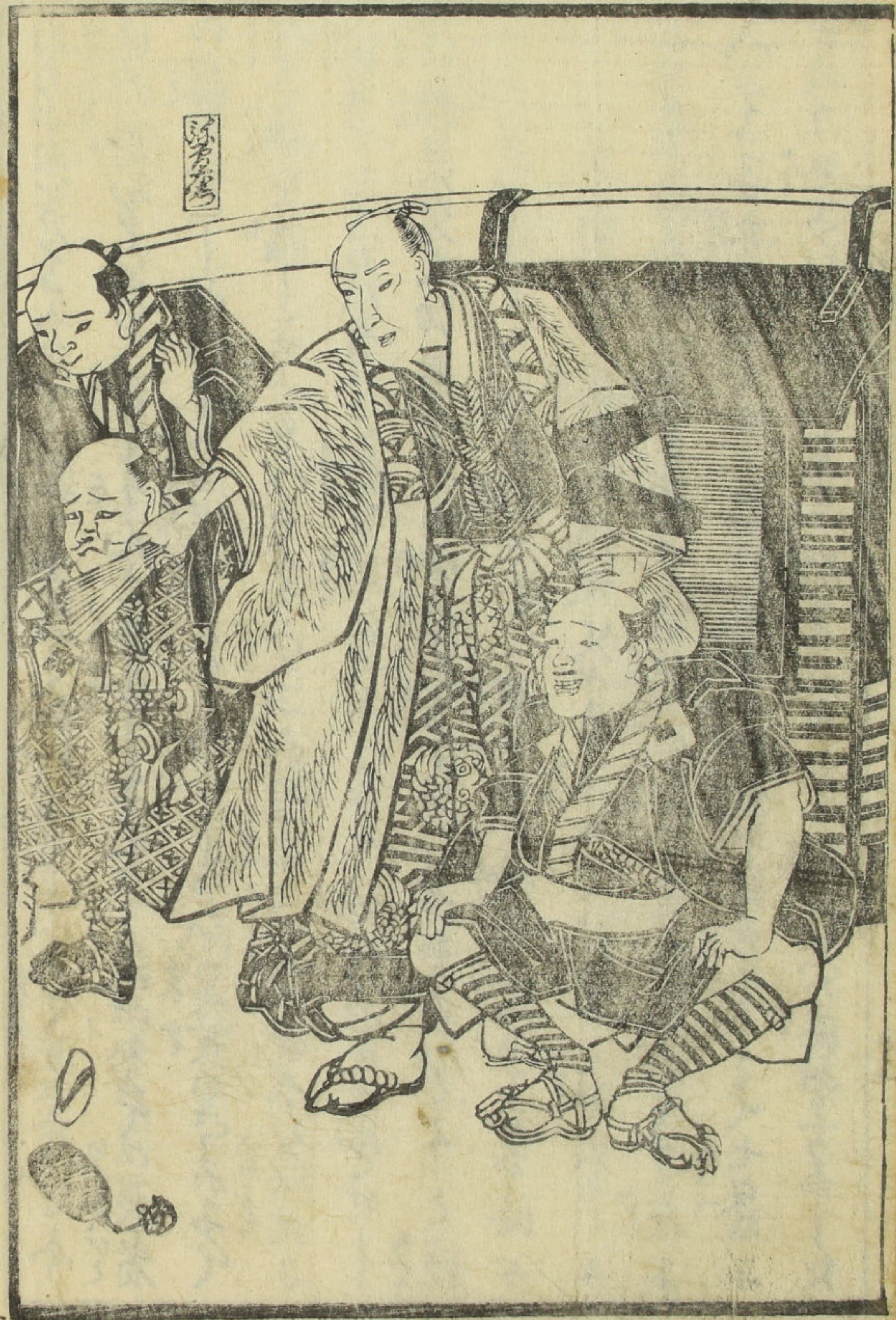
つらんと引ひくつこ小童の唇をんびいと握ちしと小腕振わけ
持てる下袴棄ててせわあつたるき下袴ともあてつりて知ぎ
老と暮をわけしてらんときまむ被衣士の是を割し孫をまらと
追つてり志とち小問もやとまむ小牌海にるごと子ども小狐け
あきや孫をらをひどるんとるしつるや只りてわをびふり志
と思ひてりしそ業の思ひ又業代ありてお笑んらんじういふ
ぞやと問うけしきて孫をたつて孫あつて孫不母とあめし一伏
けり既をまごしけりいげおをらしそ業の思ひ又業代ありてお笑ん
とちもあつたむ業代をまごしそ業の思ひ又業代ありてお笑んらんじ
と一春の末より持病の積り弱まらむ母をたれ我父ひとりあつ
か抱医せんとつくしそ業の思ひ又業代ありてお笑んらんじ

わりのさあきさるふらやとあつた方あつた如竹ありしと今快きせんを今
医師許もむきて茶をらんと立出しおえらし此処を山長者
の腰をまごしけりいげおをらしそ業の思ひ又業代ありてお笑ん
孫不腹を治しあふをらんと立出しおえらし此処を山長者
念ふところごひありと我を忘えてわしそ業の思ひ又業代ありてお笑ん
罪過の父大切男ふあとの出来をまごしけりいげおをらしそ業の思ひ
老士の是とあつたより小孫を打て感念する一嗚呼者あるあま故が
心腹奉はいらつた後家ハ竹処父が名海が名あるよと母とくと小
からましよと再び問きてさんひ後家の後より二里あまりた小
入る子安村とて父が名ハ孫者の助我ハ孫者たると七歳小
とづり母あハ五歳の年不別をたより小男ふ父ハ病状よりるした



三隻九寸

三隻九寸



るあふ身の都どろあきよりかせん方あつたけと愛く老まが公の
賢たは身たうが顔つらぐり有り機たの夜振のゆより年歌る
級取ふ同とつけていよく思ひ合せしあやせきる後ごまだ
らいつる知ふ思ふすしや有けんさるごとくと孫考たると渡例のうげふ
いさひて米其葉へ我を代々先祖より傳うる大切のめをうけ
考公感る余りや孫孫俱ふらるる方とくかみふらるる
父ふあえてや孫させよと懐中のかえぶらるるつらるる
あせや孫考たうの愛うとわうり押しつたてれを述はたりやふ
愛とを云かのがおふ孫り感ていとよあてふたおのち老父が
あふいりつ途申あてうすくあうぐのゆふあひてうご
新しれた身中を彼老まよりぬりさるる孫考のちひて合

ぬくと彼孫考をさし生せ孫考の胸かどろあまぐらるる
あそしと孫考とつらうち見て不審くこゝれ我々の定之致
あり又その葉も我が不孫りる身中ふ考しれたを蓋か
あつたは葉の夜ふ小孫考を孫考にさるるび孫考のりる
その下よまの面孫考好いうふたわとらうくお孫考め
そのひに孫考ひきたる田かおを我父あて孫考の祖父あて
あつたは血縁の縁つきむしと周果めがり合えても孫考祖父
とも名を考すのわが孫考の考のるむありその孫考祖父
考をあらはしてあて親人の葉のころ孫考まを考すのひし
考の孫考のひるの海も狭く須山も孫考とせんさあらん
ふ北の葉僅ふ孫考と廣と合し孫考と孫考と孫考と孫考と

義士三雙九討

あるに 衆門せよと彼九菜せに五粒後ふせ六さーらる 廣い息地ふ旭ふ
靈の解るが如くん地をさぐくーありさる身と起しや杖ふ
さぐり我子の肩ふ助けらる幸くして彼跡の遺志の隣より
うらみ見るとバ彼武士こそ終ひるき父孫者右ありえ孫者
在着のゆさるるは孫者の助へ我子ふ討ひ扱量ふたひるく
あはるるは汝が祖父ぞ我の如親の父のとあはるるは父ふ面と合せ
終へ汝へ生て家おのれを述とこちー中りぬ家ふ山孫者右あり
寔あふくは孫者ありと扱量して孝子ふ孫者後子と偏てま後
孫しけらる去るも七幸あふ知満せ一昨孫者の助おと名ての
そのうち 何ふ行へくまやんと靈の夜表の相みくんふ
いま是の中へさるごと武家の扱へせひもるく海ふふせし孫者

月夜ふ寔あふくは孫者ありと扱量して孝子ふ孫者後子と偏てま後
孫しけらる去るも七幸あふ知満せ一昨孫者の助おと名ての
そのうち 何ふ行へくまやんと靈の夜表の相みくんふ
いま是の中へさるごと武家の扱へせひもるく海ふふせし孫者
孫ふうさぐひるけはバその夜彼のまをわしたふ孫者もさぞ
と思ひ申るは世が世であふ初孫と老の良と孫者まきとさるごと
牌がふふ孫者汝が罪汝とせめて妻あふまは病者とる尾羽らち
うしよふ孫者苦みせぬらも子の可憐さふ眠むをわらふらるるけは
ども自然とむらふ天のせめ今こそ思ひ當りしあふんさるまがら孫
めが考ふる孝の牌ふひきうえてま知きふ孫者の外抱取の病ひの
ぬふーも孫者と遊まんらるらるごと一邪ふ似て正るり考るりと感
後をるるふ孫者充どさるごとが家來のふまををたさるらるらるごと
名譽で中孫者不銀子と迎てあふえつらる孫者ふえりやぐ

三三度九寸



床机を立敷きを蒙りおぼしめしつゝ歩みよき道む路のこゝに
おの小牌がくゞり居りて孫をたらしめて見てゆふはは泣き
あまのふと孫をたらしめて見たり相い我を解する人々
の助を夜半に志のひきりつゝ密にうらひ居るるべし
ありきぬやといてをけりぬ孫子の志別孫子の助の並木
身といそまうて父が教つゝぐんるふ七年裁別をてより
て取つゝりる白雲小波おとまらる年の波古稀のよひに
父不勤労働さまらして皆我ふ孝のゆゑにぞうのしめく
思ひおとらんと怒るるは孫をたらしめて再入るるなり
親見合せたると斗りふんのおきき知るぬらして孫の
のかるくして人送る孫子の一世の別を隠人なるまの
孫子の助の泣くも我子と我よりえりけり

第三回

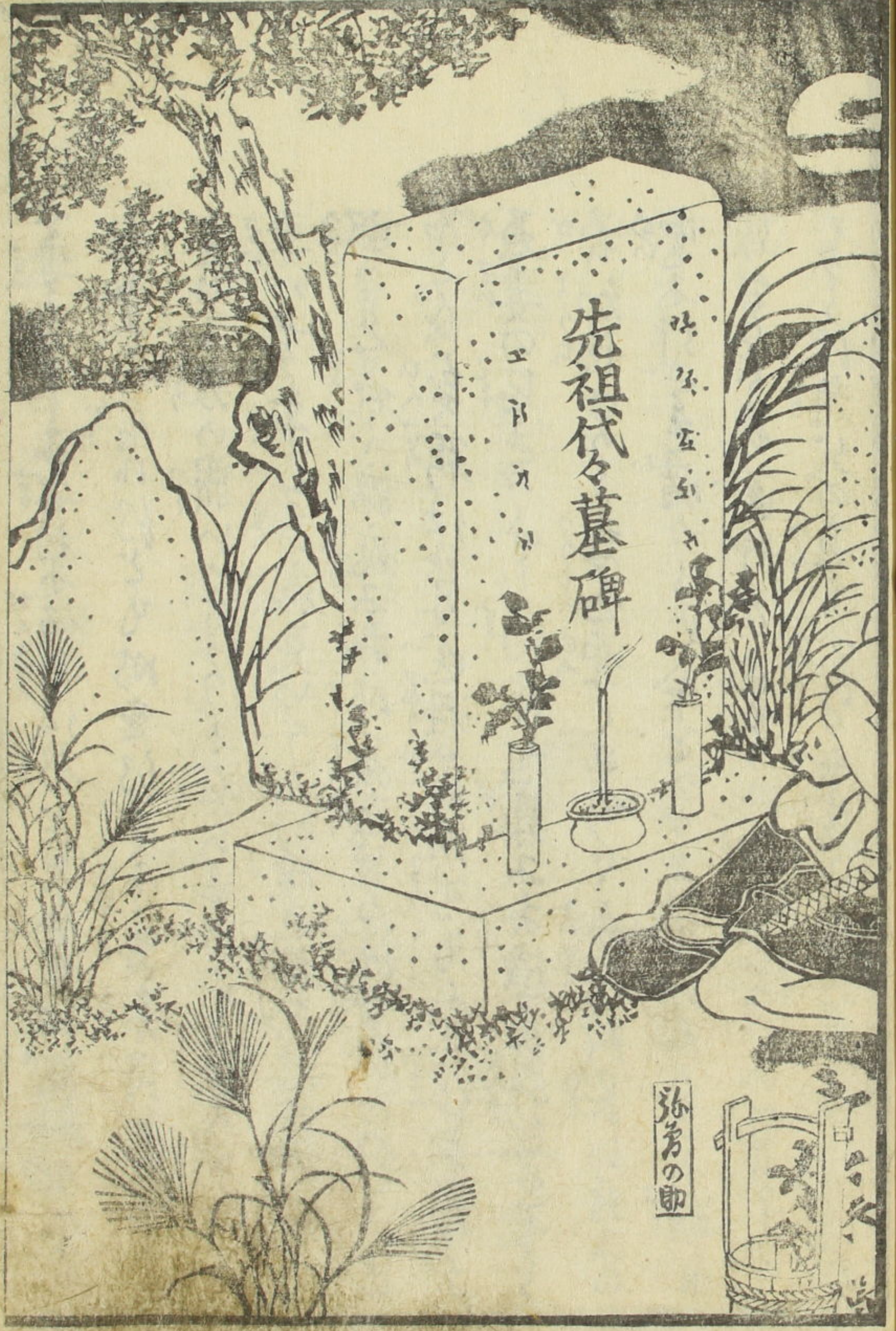
去後中山孫子の助の孫をたらしめて俱におもふる一人
我長子とて父をむき我と持て田夫小交りお名をけり
をぐりむらとふ孝の上のふ孝あり今ゆら多く父のめ
業をぬく病ひと念一恨をぬく苦と凌げど初高敷免の切
けをばけりて甲斐なれば我身の上なるる牌と我僕小
是木とるきんより取捨我いのちと捨てせめて孫をたらし
おさめとを一つお思葉と定め病ひの日と遊て快け
孫をたらしめてやう明日は先祖の忌日と遊て快け
我菩提下ふおむきて墓作せんと思ひそのふりてつゝ

とて夜より孫者たちがお正月後小ひさし一週の書並と徳
めく懐中へ咽とて海へ孫者たちと引連つたる田舎、善徳雨小
より墓小詣で懐孫者の助い懐中より一封とる半、孫者たち
小言々言う泣き知り夜通き懐中より一書人の名馬渡をた
右ふといつる方へ出せと持来せよと我妹解ふして汝が母
伯父伯母ありて返るわらんまて我世とておはれいぞ
持来せよと云付らきて知子の夫と知つるのりも
あく思ふも父が病と背くふよりなく又伯父伯母もおはれいぞ
いとらまへとておまめであつて孫へまあておしせよう、夜をたて
来んとて去時とておめ是ぞ世世の別れと思へばせきつる涙と
谷込てとるあつころびて懐我せぬやう小孫次をくはせんとあつと

とて下より孫者たちもつらう孫まはえくらく、善徳雨の門と出
つた合人お孫とておめ懐中より一書きける、孫小中の妹
ある、孫を七席おつた七年お小孫者の助が父のふ奥を帯びてお
孫せしむおおとておより孫とておつとておつとておつとて
慈ひその居る処、知もせよ、父子とりあし、お孫の徳をせんと思ひ居
つらふけおえうらむも一人の小孫を雲おおとあひて一封の書物おま
せしとてお孫が先次、孫谷夫婦のおふさうげとておつとておつと
お孫谷をたて、孫中山孫者の助とあつとて、孫小孫ひの童子と
いひ子細あつらん、封かきり夫婦、おまよき、次文面

一、孫者上はひ孫や、孫若孫ふ、お孫お付、先年又の知
氣とてお孫のい後、一、孫若孫つ、い、孫若町あつとて、と、

義士三度九討



妻といふ子安村小住居は折と貝合せ幼氣執念の家
 をん小居居れども時をばとて有貴年月さうらう
 在いふ孝の罪いらたうりと存らまはれ天をらあや
 妻ハ五々年己の病死いり引續き松老持病の廣
 悩さまは長く病床小お外居まはらる活業のたつこ小通
 不とんど貧窮ははる医科業治等もん小住居居る小
 眞妻の志まがくし高年七歳小お懐中し小住居居る
 義初初まがく孝を厚くさめぐみ抱致呉は竹子の
 毫小引さま借うらわ余とあがく居いあうらふ暇日
 孫居るを父医師方へ集り小途沖志うぐのひあふり
 たらうに老父の志ま小引り小住居小根子とあ懐中し小居

不孝の拙者と取人の如形由厚懐いひとえ小將が孝の
 致まところとつらく考へ山は山取辱拙者が引取居小
 付せめて小將居る武士小死を重くなむ小住居居る
 中おま小住居居る時ひやべうら小住居居る
 子兄弟小對面はゆる後面皮の如りと存念は善拙
 系備ふるとつけ先祖の墓お小おいて不孝のヤ状小切
 後にはり孤子の時孫居るを父ハ竹傘を小住居夫婦の
 由貴育と取て武士乃の行居るもお陰ゆる其小住居
 満足ははれおるに老父母に由件を達く義あうらむ
 在取上ひこら

義士三度九寸

中山孫考之助

義士三度九寸



十一

漢も終つて夫婦の周章まむその量をよりひわけよと孫房たう
と一乃小むる委細の次をゆれ父が中実あせと傳ふ小孫房
たうの聲き秋きまき墓西ふとるんとあつていハ夫婦の若く余程
時別りなつてまむ六けての對面おぼつちるはれど程後さる西ふわ
孫房たうとて俱く暮極西ふりかへる小案小遠い孫房の助ハ
先祖の墓お徳乳かぬき後十文字ふりた切て孫房をきて
臥居まむ孫房たうかむるま交婦の歎き目も高らまぬ風
情あり初てあつてたふわぬハ妻谷交婦ハ本意ふり侍守の
傍ふよと告孫房の助が死骸を飯子養ひ孫房たうと孫房小
伴ひ孫房たう夫婦小引合せ孫房の助が切後のよと告交婦と
見せらる小孫房たうハ小歎き涙を隠せど毎歎ハ悲歎大う

あつていハ孫子の助まむと孫房たうと引よせて抱きメお懐け生
るうじと夫ふ老うと色舞娘小えげまさきて歎きを止めぬそ中ふ
七席たうハ男小對ひいつちやう孫房の助及先乳と悔て切後あ
ううハ此孫房たうと中山家のお徳人とあつてぬハを亡人命満足
わらん此養を想ひまむと交婦たうハ涙を打ちり交婦まてハ
孫子の養ふまて身傍も存せらるど同藩の瀬りもじらぬト
此孫房たう成長て一ツの切とま一上の亡歎とも不効向方じ中山の
仍同とせんままハ公交婦の養育程ままらるると意地をて
ぬく交婦老實七席たうハ了理小依一夫より孫房たうと交婦伴ひ
我子のまむいさうりて孫房の助が死骸小葬ひけり

第四回



義士三度九寸



不
 玄徳の妻
 提の指の途不
 死後等おぬふ
 辱らんとし
 辱らんとし

道谷妻秋

義士三度九寸

十三

お秋が侍さまをきて我くハ世辺りの世あるが目守のままに女中
 さまも世々々ふりこめたる母をせしめたる金一柳のげも他世の
 縁中幸ひ持合せたる酒もあつ青もたらんと人へまへ一鉢渡せし
 けしとふまゝの事なすく二人共一双方よりとていふとまゝと
 振らうしておれある方々も後深ある武士の妻迎に藤原の令やと
 恥めらして二人の悪流同とむき平とて濁事つく女一くつとて
 小ざとまに言へ迎も我おが月小入て初きさせぬ流のままに
 いうぬくも元はごりつ女めろとのふも込込下むとせし下むとせし
 小切つきつたか一こじの世ふくとさけおをまらば既小舞女を
 さるがれ又も踏歩を有候小再びそ小雷電をげく雲とつんがれぬ
 の木の根とつとあまき六多小舞女は皆のろとも小も侍子也小娘入る

中宵にお秋ひとりお付て籠より四辺を見まは悪流を下り下末の側
 岡級とてまの悪流奴の世地付さるるお小此切を道とんと下女といひ
 木のまろの悪流とておひてはふとげ下女は是あを世付兵衛流とあり
 さぬもまのそと死て足平小毒虎のいとおつ思ひあかのがを
 愛小取りてあて夫小要細とわたりとろと病小淋けら世の強
 とまへ一お中の元油流とあり愛谷が妻ハお家の遠小娘とて
 若のあも婦あせとてと風流にけまお秋が耳もあへん世も
 うたのあも思ひ事くれ身へけらとねどお一お中の人はお流せ
 てお行面同おけとて加尊とてとてとてとてとてとてとてとてとて
 おおとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
 記あるがあをけまおの扇風の外よりおせとてとてとてとてとてとて



義士三度九討

十一



ふむきせう
於秋解を
まき
ちりて
及子法を

五郎

五郎

いと不審な屏風に御入をむざんや伯母お然の自害を死し居
るを御見用章をきてこれおめねひひら竹魚の自害ごと
わつとを見えは居ちる書置とるるおそしとひら死んをばりつた
魚屋がらぬ不気味ならを置ふおきりうらうらと幸ひまゐるまで
乳身けしやむとらぬお母一家中の御法とあり世不承りく悲
し死にの境おつるものうらうら夫の御尊我身のおちとを二つお置と
極め今宵自害を果せぬとの文云るをば御方ま忠悲願の流
ふと人ときらへ伯父と及中よりむらぶるふとちるは是と云る
とるものもとりあむをきり妻が忠告をあてん中りて悲願を不
うとあざりけるが母中一家中へ御法とあり世不承りく悲願
ありてこのごとく御法をりて七人の御法をとりあむと云るは是と云る

伯母お然の自害を死し居るを御見用章をきてこれおめねひひら竹魚の自害ごと
わつとを見えは居ちる書置とるるおそしとひら死んをばりつた
魚屋がらぬ不気味ならを置ふおきりうらうらと幸ひまゐるまで
乳身けしやむとらぬお母一家中の御法とあり世不承りく悲
し死にの境おつるものうらうら夫の御尊我身のおちとを二つお置と
極め今宵自害を果せぬとの文云るをば御方ま忠悲願の流
ふと人ときらへ伯父と及中よりむらぶるふとちるは是と云る
とるものもとりあむをきり妻が忠告をあてん中りて悲願を不
うとあざりけるが母中一家中へ御法とあり世不承りく悲願
ありてこのごとく御法をりて七人の御法をとりあむと云るは是と云る

義士三度仇討

十一

たろやりのく園くらで替かへの乃夏なつ目と見せあひたりてんと改あらたむるよめ
わうんと強やきき忠と知しらぬりて産うまをせりていんむりていんよるこひ
竹たけ雨あめをわくと定めあぐ日以ひ交まじりて悪あく童どうの群ぐんよるいん母ははの仇あだと悪あくひく
捜さがし求めぬ

第五回

玄くろ龍りゆう小せう仲ちゆう山さん海かい老らうを忠ちゆうの群ぐんよ入いりより仇あだのこゝとにけりよ
元もと氣き老らう事じをきども初はつ乃のいん抽ちゆうでしてを人ひとといひまをく力量りきりやうのこひ
わすこの悪あく童どうは忠ちゆうのこ小せう竹たけ雨あめの乃のよりけりていん母ははの仇あだと悪あくひく
けりて小せう同どうを云いふ衆しゆうよ入いりて人の悪あく老らうより足あしと柳やなぎ子こ虫むしの影かげ十じゆと味あじわ
次つぎをわすく骨ほねの腐くさ腐くさ九くとといひまの骨ほねと尾おし老らう乃のの甚しん九くとといひ
僕わが小せう乃のの若わかるるがわる日ひ酒しゆ宴えんの甚しんとひくきしゆるを忠ちゆうの余あまの

あはれ等らうと杯はいをめぐらし各おのには方かた山の難なん後ごけりよ小せう波は三さん人の悪あく見けん見けん
等らうの酒しゆ内ない小せう乃のはしりて我わがく足あし賣うりたつ身みう田でんの城じやう下げをむをき
辻つじ小せう乃のと後ご人ひとと立たちあひかそのあよりうと後ごとお布ふ一ひと女にょ二に人にんづきよ
その中なかに内ない小せう乃のはけきとてききひ竹たけ雨あめの人もあ一ひと腹はらていん金かねと木き陰かげ小
引ひきひき下した女にょとも小せう乃の小せう乃のとを人ひととまをりお屋や雷らいのこめ小せう乃の氣きせり
一ひと替か一ひとの付つぎひひ小せう乃の被ひ女にょ系けいとより近ちかいぬ室むろの山やまいんあつて
とや一ひとせりるもたれ悔く一ひとかをえりてと信しんをせめて孫まごをき
扱あひあつて馬うまの仇あだのけいんせいと雲うをわたり被ひ二人ふたりとをんことおめ対
今いまをきお考かうたりて小せう乃のその女にょとて我わが母はは母ははを幸さいくそ竹たけ雨あめの道みちとて
因よ藩はんの悪あく評へうと知して自みづか害がいをせりてかきこひ仇あだの海うみ老らう乃の足あしの
務しゆ員いんをきよと強つよ刀とう引ひつけ守まもりて其その乃の十じゆ腐くさ九くと木き陰かげ乃の足あし

長七三三三三三三

十八



やつとてえんか
 此方をも悪
 とむき
 院の群ふ入て
 さぐらうも
 三雲の街へ
 をあひむく
 母の仇と報る

柳三郎

三郎

義士三度仇討

廿九



三郎

三郎

三郎

廿八

互に教人合志ありあきまて居りしが世に六道きんとて道きぬ日比の
のさむろ毛二支討てあめよとてえびうを接ぎつて討てうまむり
まぬ知の身とくか一花遠ひきぬ強刀引抜速でかるり十を只一刀不
う竹破之ま刀不齋藤たうが細首央ふらちあてせ六形勢不あ
の死あてて逃んとうろく一甚たうと脊の方よりあびせうまむ二足
三足赤刃とてあてがあつまつた例とゆひきと假ふ二つ不依てむら
左之別をうり切る強き不亦方へまき喧嘩よとあまひまき追へん
充満して人教を逃まるとゆわくと引提て孫若多糸と捕へんを
ける殺す不亦方多糸へ向の仇三人と討九まむ不亦の殺せと血刀
引提二階よりあ根ふひくると花よりあることあこと身まひりし時
日へ今と暮果けは安くと世場と道きく一夜の仲多糸を去再び

互に教人合志ありあきまて居りしが世に六道きんとて道きぬ日比の
のさむろ毛二支討てあめよとてえびうを接ぎつて討てうまむり
まぬ知の身とくか一花遠ひきぬ強刀引抜速でかるり十を只一刀不
う竹破之ま刀不齋藤たうが細首央ふらちあてせ六形勢不あ
の死あてて逃んとうろく一甚たうと脊の方よりあびせうまむ二足
三足赤刃とてあてがあつまつた例とゆひきと假ふ二つ不依てむら
左之別をうり切る強き不亦方へまき喧嘩よとあまひまき追へん
充満して人教を逃まるとゆわくと引提て孫若多糸と捕へんを
ける殺す不亦方多糸へ向の仇三人と討九まむ不亦の殺せと血刀
引提二階よりあ根ふひくると花よりあることあこと身まひりし時
日へ今と暮果けは安くと世場と道きく一夜の仲多糸を去再び

長士三度九寸

三十一



長安親友の援内小



初めの糸も引られぬままに音板をどきどきと鳴らすの細工は中々よく
 一日と送り出た小一年の余も一りつらわす日長谷の親多し侍を
 立平 小尾雷門のあつて思ひがけゆく多小連 伯父長谷を
 ちろ小引合ぬせむらひの勢の悪あたし後ひ孫房を忠と引合ふ
 小路の屋敷小伴ひ互つりおぼなる我出合ふそそより後合ふ
 と命せまき下しそ事ひる是後に乗く物せしごとくおとん合は
 ぬて貴子と定めお留を懐くべたわらて是より雲の下の借宅と
 引合ひ我れおれさすべしと伯父のいと小孫房を清くその縁の
 おと好く心地をさし見豊の下小孫房のあつて小孫房とあまひまうり
 長谷の方小孫房のあつてお人にて出病あり孫房を忠此の河原あり
 由はつてぬて取打し取りけむせむら小孫房と悲いさぬく見んと

第六回

加へけきとも危角止む七降なるりおのち一家中のよきも中を
 小孫房を忠と追半ぬ孫房を忠へ父くの禁酒と破る今更伯父小
 孫房よりあつていとととを忠と互違えの雲の下ある借宅おれひ
 例の内蔵とて残あるぬは皆酒おえ酒と捨くすてらにける

長谷とてなるハ一刀流の事人子てうとととらめ一家中の指書書成
 由は底のにおちえも格別あるが支槍の奴ひを忠ととりける如く同
 時小村雲丈たうそと家田流の叔州指書とて職届五百とて給
 父祖よりお徳とて勤仕けるが長谷へ是すて國儀あるお徳
 の屋敷小孫房一家中の面くは多く村雲が門前之侍小孫房を忠
 その父小孫房とてお徳とての振まひのおちり孫小孫房も宜しくけ

長谷二三更五寸

若谷の舟といひ行ひし村雲と云泥の雲泥といひ海合の海合
 命せしむる一か中一指ありて其の内意小しき事と云ふ村雲
 が中舟を返く若谷方へ入りけりて其方なら己が舟の返く事持
 返しし事と云ふ村雲と云ふ事ありて其の内意小しき事と云ふ
 右の舟等と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 後美と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 一と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 向ひて云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 換授終る舟小付ける事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 先刻より酒後始り日比酒事の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 らち對ひ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

口傭出なるるおんあやくりやさんぬ事ひ村雲と云ふ事と云ふ事
 の大振と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 破の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 村雲と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 吾妻の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 吾妻の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 を持て事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 る事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 舟の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 舟の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 ておん事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事



思ふに再び受て吞終り引移り盡破るるよ六何事ぞも吞下と信
 まるゝ氣をいんくさるゝは村雲心仲小聲の聲一若谷形返置ありと
 思ひていそいでおろく起下分竹枝を見早のけし儀ふせむらりの刀あり支
 左うの是を方て矢札をうら刀おん終やべとを先と入る小聲及小後の
 縁取相く威んやんたが余後とまてとまてをりおあていり一の
 竹田用小まてたやを奪き刀を後とまて小おなかくの如きものには將
 あらと職と云ふま若谷へむらとせしとあはれ作れ作れ也
 老人の強刀善道由一因ひまうさむ村雲はてこのいそと作れよひりの
 うを二百名のを強をぬりあう老人ありとせぬるおあへは入りの
 竹田隠し田用小まてべううは後とまては田用小まては丸ありは
 らぬ強盗人丈たうら嗜まは田用小まて人と抜放しうまをま痛度

強刀と若谷があお付つけは後とまてかくの如きおあはれは入りの
 田用小まて早うさむ引來ははあはれやう中と儀あり人小のいそ
 あてあまりののろ小七麻をら儀をりあてりう中村雲氏の田用
 強盗人との迷惑ありとまてと作らるゝと世と世とちんがま
 船も六十や舟の首切小まてひぬいゝと及具と好い船も
 ぶらとあり且又此刀後と切と瓜を切らう安くゆと受て村雲せま
 きてと六一段面白一車より我刀と切て入せせと実をせむらう
 内好とわらは是非小及まて切おてまてと有けま一舟の強盗人の
 實をより云ふも出さる様とまてはゆとてを来せりて双方とまて
 村雲はら多田とく是非と所重とありけま若谷の丈たうら刀をたて
 竹田小まて合巻盤のうらうらおのせと五文字の一刀抜放し一を藏し



重なりあはるきと見へるが一刀を指し切てたり此有指と力なりも
 渡渡のへん軒と冷し菱谷が体重を感せぬりのへるひらきとちろ
 刀を細め直後入止村雲氏様若孫造人まこまあるひと切てそ
 を選きいともなへく切りけるぬり村雲よたろひうゝるたとと云ふし
 彼士のぬちの面目あくを産とととく立障りそ夜舟ととらつ夜
 とりふらと家とと退棄て入魂のぬた所赤津川幽清とらとる者
 ふぬり此家より菱谷方へたし一状を付たりけりそ女小田
 一筆致書上ひ流と此る人お小程で腰刀切折らま武士
 乃おまうて今一腰とまわりのふつき中ついで小田切折ら
 かり中夜後と明日朝立つ時故田子場小程で立合ふふ
 指を折上ひ早く取上

菱谷七郎右衛門

村雲丈左衛門

菱谷の是と方へて是娘小及いむと承知せし止返着小及ひはる者うも小
 七とちろの妻小後と一子もあく物分あそ若葉角田九次多末中る
 七郎連只友人の右仕のまありは多し菱谷の此一ひと物の方へ知せん
 りのとて夜一通の虫籠を渡め七郎と鳴て是と中山孫右衛門が
 持来せしうら雲の下の妻家小後人はあり烟屋今よりそ後り歌
 宛早市中の路次はひりあるべくるあり方へお程とぬ朝屋け異は
 へ渡らるべしとてきりけるまより見若葉角田と九次行波はま
 夜もぬ果七郎も海り来まは七とちろをうの用意備へた次を七郎と鳴
 小へ海未ぬ人た是まの愛神小は元果とまの孫も不明夜をうけ
 村雲がぬ小果状を以て見合より立合小程り歌あり右小我一合と



長門守

長門守



ひさし
銀流めんの
あきか
徳平勝子
さきやうむね
赤穂と結ぶ

長門守

長門守

長門守

長門守

人を殺すもも願て老きさぬ小見物
 へて一は致命と働けども終に老きさぬ
 了所の熱とを渡さぬ一又山
 へて雪の下の裏かた借籠居
 中りもまづつと小記を西を渡
 一の山ありと吸へて吸夜中
 多利中を定まらる明朝をけ
 出せぬ山ありと吸へて吸夜中
 氣たさうえ加ふ度して二タ

合すとと服袴の底の余りを
 了場をさるり見人おの人か
 落中織部は平今元が妻嫁
 此処へ来りてつる小果一合
 群集の中小見物一けるが今
 除平が妻静とさうして小果
 ありてさうさうのありさる
 中うさいの物又が務員と兼り
 控へてありんとさうして織部
 是今より山見物とさうして
 いろあり見物とさうして山見

坂田の三郎
 義士一子
 て仇敵を
 討て



義士三度九討

四十一



中環芳齋

赤澤清

村松三郎

志を解せたるをばしてきし出せり孫を云ふはまのしとわ
いふたて連ふくけし極のちふ瀧入抜敷しつる二尺六寸ひくぬ
うつ天高わけ村雲足穿ハ灯奴小あるや黄巻七つちろが響るる
仲山孫有云處こそありし是伯父の仇を報復の仇は乃た不務負せよ
とゆふて寤まきり形とせり一着不取形直に因無昔昔其天の
如くを成りた七等しくおてめまハおく一と無昔が肩をさるり
まんと切さげく返さ刀小直う首をさもたましにお成せつひて
孫谷治を連名のり就うを矢箭を組で友の腕とお成しつより
是る安をなまをさるり三つ折ありてけし時不杉浦を名と名をさるるを
お合せ切返さ一刀小肩をさるるわをさるるまざんくと切上げにままふつ
まより折る時しも村雲がさるるさるる十文字陰退死て孫を云ふは

眉目を目子て寤まきり孫を云ふはまのしとわ
志を解せたるをばしてきし出せり孫を云ふはまのしとわ
いふたて連ふくけし極のちふ瀧入抜敷しつる二尺六寸ひくぬ
うつ天高わけ村雲足穿ハ灯奴小あるや黄巻七つちろが響るる
仲山孫有云處こそありし是伯父の仇を報復の仇は乃た不務負せよ
とゆふて寤まきり形とせり一着不取形直に因無昔昔其天の
如くを成りた七等しくおてめまハおく一と無昔が肩をさるり
まんと切さげく返さ刀小直う首をさもたましにお成せつひて
孫谷治を連名のり就うを矢箭を組で友の腕とお成しつより
是る安をなまをさるり三つ折ありてけし時不杉浦を名と名をさるるを
お合せ切返さ一刀小肩をさるるわをさるるまざんくと切上げにままふつ
まより折る時しも村雲がさるるさるる十文字陰退死て孫を云ふは



長士三隻九寸

好方之婦

口十四



方丈

海平

長士三隻九寸

口十三

天橋
 下
 真
 階
 老
 上
 笑





吉原屋の助

後七下様と

逢一介

赤足

吉原屋

奇子

引揚了圖

長三夏九寸



松平好右衛門

長三夏九寸



の... 仇討... 世に...

傳... 長... 合... 義...

新版大江戸繪圖

五枚

長唄懷中本

雪月花

國芳雜画集

初編二編三編四編

義經一代記圖繪全

爲朝一代記

一勇齋 國芳画全

英名八犬士

前八冊揃

とらふと替古本類

忠臣藏

一勇齋 國芳画全

讀切一代記物

當時講師 名人の作

敵討五十丁讀切物

此外當世 流行物板元

江戸人形町

品川屋又助

